

第十二話 二王は是如来の
足輕坐禅也

丸川 春潭
延時 真覺

いちにちしめ いわ ほん ぶ もと もの さわ
一日示して曰く、凡夫元より物に碍らずして、ぬんとした
によらいしん あ るくぞくほんのう せ うしな い なり しかるあいだ
る如来心有れども、六賊煩惱に責め失われて居る也。然 間、
におうしん もつ るくぞくほんのう ふせ とき おのずか ほんしん
二王心を以て、六賊煩惱を防ぐ則んば、自ら本心はそだつ
なり たと げ ば ぼう あ うち ひるま ばん だんだん ばんしよあ
也。譬えば下馬には棒つき有り、内には広間番、段々の番處有
りて、堅く守護し奉れば、君自ら太平に在すが如し。
におう これによらい あしがる ざ ぜんなり まず こ あしがる ざ ぜん しならい
二王は是如来の足輕坐禅也。先此の足輕坐禅をよう仕習めさ
れよ。扱亦座敷には十六善神、四天王、段々の本心の守護
しん あ またじゅうにしん かしら じゅうにし いただ たま これじゅうにとき
神有り。亦十二神は頭に十二支を頂き給ふ。是十二時
ばんしゆなり かく ごと じゅうに ときちゅうつよ まち とき ほんのうしよめつ
の番衆也。是の如く十二時中強く守る則んば、煩惱消滅
して本尊自ら堅固也。此機を受ずして煩惱に勝事有るべか
らず。此の佛像の道理計りは、是非に御公儀へ申し上げたく
おも なり い もの ゆうれい な い た おも
思う也。云わるる物ならば幽霊に成りてなりとも云い度く思
ふと也。(上-73)

かんざん
寒山詩に【八風吹けども動ぜず天辺の月】というのがある。八風と
いうのは、利・衰・毀・譽・称・譏・苦・樂の八つ。利は成功する
こと、衰は失敗すること、毀はかげでそしること、譽はかげでほめる
こと、称は面前でほめること、譏は面と向かってそしること、苦は心

身を悩ますこと、楽は心身を喜ばすことで、我々の心は、自分の周辺に吹き荒れるこの八風に、いつもグラグラ揺れ動いている。儲もうかったとあって喜び、損したとあって落ちこみ、人に褒められたとあって有頂天になり、馬鹿にされたとあって消沈する。この八風吹きすさぶ世の中に処して、天辺の月のような不動心を持って生き抜けというのである。しかしながら、「八風吹けども動ぜずの境地」から程遠い生き方をしているのが我々凡人である。

いちにちしめ いわ ほん ぶ もと もの さわ によらいしん あ
 一日示して曰く、凡夫元より物に碍さわらずして、ぬんとしたる如来心有
 れども、六賊煩惱ろくぞくぼんのうに責め失うしなわれて居る也。

鈴木正三和尚がある時、大衆に向かって言われるのに、「凡夫といえども生まれながらにして『八風吹けども動ぜず天辺の月』ともいうべき何物にも束縛されない主体性を持った(又ウツとした)『如来心』すなわち『仏性ぶつしょう』が備わっている。それが六賊煩惱という嵐あらしに吹き曝さらされて、どこかへ消え去ってしまう。」ここでいうところの六賊とは、
 げん に び ぜつ しん に
 眼・耳・鼻・舌・身・意の六識のことで、外界の種々の刺激に応じて様々な欲望を生み、人の心を惑わす種となる。憎い・欲しいかわい・可愛い、そういった煩惱が起こると、その煩惱のために本来持っている如来心が覆い隠される。我々凡夫の人間には百八の煩惱のみならず、八万四千の煩惱があるといわれる。これらの煩惱の雲が如来心を覆い曇らせている。

お釈迦さまが悟りを開かれた時、「山川草木国土悉皆成 仏しっかいじょうぶつ」、「一切衆生ことごと皆 悉ちえく如来の智慧徳相を具有す。」と言われた。また白隠禅師は、「衆生本来仏なり。」と示された。すなわち人間は生まれながらにして仏と同じ智慧徳相をそなえ、仏とまったく変わらない個々の仏性、すなわち如来心というものを等しく持っている。そういうわけで仏性・如来心というものを持たない者は一人もいないが、煩惱によって覆われてしまっているから、その煩惱というものを退治しなければ

ばいけない。しかし、それを退治するのは容易なことではない。そこで鈴木正三和尚は二王禅ということを出された。

しかるあいだ 然間、二王心に おうしん もつを以て、六賊煩惱ろくぞくぼんのう ふせを防ぐ則ときんば、自おのずから本心ほんしんはそだなりつ也。

二王のような激しい気力をもって六賊煩惱を一気にぶち切ってしまうなればいけない。良い気持ちで、うつらうつら坐っているようなことでは、いつまでたっても六賊煩惱を断ち切ることはできない。すなわち八識田中に一刀を下して、分別相對の境を脱却し、大死一番しなければ、「真実の自己」を究明することはできないのである。

警たえげば下馬ぼには棒あつきうちひるまばばん、内だんだんには広間番ばんしよ、段々あの番處かた有りて、堅かた
く守護しゆし奉ごれば、君きみ自おのらずか太平たいへいに在ますが如ごとし。

城の門前に下馬札げばふだという立札たてふだが立っており、そこでは誰でも馬かや駕籠かごを降りて徒歩で登城しなければならなかった。「棒つき」というのは、下馬札の場所で棒ぼうを持って警固けいごしている番人のことをいう。そして場内に入って大広間おほひろまに行くと、そこには広間番という者が控えている。また、その奥おくに行くにしたがって、いくつもの番所ばんじよがあって、それぞれの番人が居て見張りみはりをしている。このように殿様の所とのぢやうのしよに行くまでには、いくつもの関所せきじよがある。その警固が完全であれば、殿様は天下泰平、無事安全おで居れるというものである。

に おう これによらい 二王は是は如来の足輕坐禅也。
しんじやう 二王は是は如来の足輕坐禅也。

二王というのは、如来を殿様に例えるならば、その足軽のようなものである。その足軽である二王の二王坐禅でしっかりと関所を固めなければ、如来を安泰あんたいに守ることはできないと鈴木正三和尚は言われるのである。このように禅の修行過程をお寺の構造そのものが教えている。お寺の入り口には二王が立っており、この二王の関門せきもんを通らなけ

れば御本尊にお目にかかれぬ。そのことを忘れてしまって、いきなり御本尊の観音様にお目にかかろうとするのは大間違いである。二王禅というのは、足輕坐禅であるということを肝に銘じるべきである。良い気持でうつらうつら坐睡するのを坐禅だと思ふなど、とんでもないことである。中国の太白山天童景德寺で、ある夜、坐禅が行われていた。その時、たいはくさんてんどうけいとくじ如浄によじょう禅師が居眠りしている僧を見つけ「参禅しんじんは身心だつらく脱落である。ひたすら眠りをむさぼって、なんの役に立つというのだ。覺かくしよく触せよ。」と、坐禅堂いっばいに響き渡る声で大喝した。その場に居合わせて道元禅師は如浄禅師のこの大喝一声を聞いた瞬間、それまでの一切のわだかまりが一瞬のうちにスット消え去ったのである。これが道元禅師の大悟の機縁であった。

ところで坐禅は坐禅の三要素である「調身・調息・調心」、「身を調え、呼吸を調え、心を調える。」ということが重要である。鈴木正三和尚のいう二王坐禅には、勢いというものがある。体の底から突きあがって来るような勢いと燃えるような気迫というものが感じられる。正しい坐禅の姿勢で生き生きとした坐禅に立ち戻った時には、身心脱落して本来の面目が現前するのである。

まずこ 先此あしがるの足輕坐禅ざぜんをよう仕習しならいめされよ。

柔和な観音様を祭った寺の入り口には、二王門があつて、ここを通らなければ、その御本尊にはお目にかかれぬ。鈴木正三和尚は、「まず門前の二王さんの坐禅をよくよく習いなさい。」と言われる。

とにかく力一杯やる。書道、剣道において、筆しなひ、竹刀は、引っ張ったら抜けるぐらいに軽く持てというのが、それは、百鍊千鍛した名人だからできることである。当然のことながら、そうしなければ本当の力を発揮できるものではないが、百鍊千鍛した後、はじめて肩の力が抜け、手の内が柔らかくなるのであって、初めからそれができるものではない。まずはこの足輕坐禅を力一杯やりなされと鈴木正三和尚は言

われる。

さてまたざしき じゅうろくぜんじん してんのう だんだん ほんしん しゅ ごしん あ
 扱亦座敷には十 六善神、四天王、段々の本心の守護神有り。

また、座敷には、十 じゅうろくぜんじん してんのう 六善神、四天王というような我々の本心すな
 わち、仏心を護って下さる守護神が祭られている。十六善神というの
 は釈迦 しゃか の教えを守り、大般若経 どくじゆ を読誦する人を守護する護法神とされ
 ている。次に、四天王 じこくてん というのは、東方は持国天 こくもくてん、西方は広目天 なんぼう
 は増長天 ぞうじょうてん、北方は多聞天 たもんてん と、四隅に配置され、武器を持ち、邪鬼を
 払い、守りを固め、世の中を守っている神仏である。この四天王は、
 甲冑 かっちゆう を身に纏い、怖い顔をして、足下に邪鬼を踏まえて突っ立っ
 ている。

またじゆうにしん かしら じゆうにし いただ たま これじゆうに とき ばんしゆなり かく ごと
 亦十二神は頭に十二支を頂き給ふ。是十二時の番衆也。是の如
 く じゆうに ときちゆうつよ まも とき ほんのうしよくめつ ほんぞんあのみ けん ごなり
 十二時中強く守る則んば、煩惱消滅して本尊自ら堅固也。

十二神というのは薬師如来に付き従って周囲を取り巻いている守護
 神で、子・丑・寅・卯・辰・巳……というあの十二支を頭に頂いてい
 る。現在の2時間は昔の一時 とき にあたり、24時間は昔の十二時 とき になる。
 その時間ごとに時々刻々に護って下さる神様を十二神という。この十
 二神は、目を吊り上げ、憤怒 ふんぬ の形 ぎようそう 相で朝から晩まで必死の覚悟で我
 々を護って下さっているのである。「それと同じように、我々も四六
 時中煩惱妄想 おが に冒されないように強く自分の本心を守りぬけば、我々
 の本心すなわち仏心は堅固に存在するのである。」と鈴木正三和尚は
 言われている。「十二時中強く守る」とは、どういうことなのか？
 これは「正念相続」ということである。この「正念相続」というのは
 何か？ 「正念」というものがあって、それを24時間ぶっ通しで相続
 するというのではない。正念相続とは「一行三昧 いちぎようざんまい」に生きること
 で、坐禅の時は坐禅三昧 さむ、作務の時は作務三昧、遊ぶ時は遊び三昧で
 余念のないこと、当面の事に一心不乱で打ちこむことである。言い換

えれば、今・ここというところにおいて、それに成りきるといふこと、それに全力投球することである。車を運転する時は運転三昧、職場で仕事をしている時は仕事三昧、食事をしている時は食事三昧で、その間に一点の異念もないこと、それが本当の「正念相續」の生き方である。ここをしっかりと肚に入れて、充実した毎日を送るようにしたいものである。

鈴木正三和尚は、「四六時中正念に住していなくては煩惱妄想の虜になってしまふぞ。」と言われる。禅者の生き方の基本は一行三昧、何事にも三昧で当るといふことであるが、正念を相續するといふことがいかに難しいかといふことは、我々自身の坐禅の体験からもよく理解できることであります。そのためにも、一日一炷香の真剣な坐禅、いわゆる静中の工夫によって正念相續の基本を養い、作務においてであろうと職場においてであろうと動中の工夫に骨折ることあります。

此機を受ずして煩惱に勝事有るべからず。

これまで述べてきた十二神のごとき働き、氣迫というものを持たずして煩惱に打ち勝つことはできない。

此の佛像の道理計りは、是非に御公儀へ申し上げたく思ふ也。云わ
る物ならば幽霊に成りてなりとも云い度く思ふと也。

十六善神がいるとか、十二神がいるとか、四天王がいるとか、お寺の入り口には二王が突っ立っているとかいふ、この仏像の道理。これは、仏道の修行の仕方を教えているものなのである。正三和尚は、この「仏像の道理」、こればかりはぜひご公儀へ申し上げたく思っているといふ。こういう大事なことは、將軍家にぜひ教えてあげたい。もし生きている間に、それができないならば、幽霊になっても將軍家に申し上げたい、こう言っている。いかに正三和尚がこの二王の機を用いることに必死になっていたかが分かる。

以上、ざっと講じましたが、正三和尚の真意がどこにあるかを汲み取る必要がある。正三和尚は、『驢鞍橋』の本文中で、坐禅というものは二王の機でやらなければ埒があかないということを繰り返し述べられている。念のために言うておくが、二王の機でやるということは、力んで肩に力を入れることではない。そのような坐禅では煩惱に打ち勝つことはできない。

昔から剣道の先生方は、「相手を攻めて打て。」とか「肩の力を抜け。」とか「右手の力を抜け。」ということを良く言います。私も良く聞かされたし、言われたものであります。ところが、「行くぞ、行くぞ。」という攻めの気迫が出てくると、肩や右手に自然と力が入ってくるのが普通である。百錬千鍛の稽古を通して、攻めの気迫を維持したまま、リラックスした構えが身に付くのであります。

禅の言葉に「不立文字」と言う言葉があります、これは、師匠が弟子に「釈尊の悟り」を言葉や文字で伝えようとしても、その真髄は伝わらないということを意味している。例えば、「甘い」ということを伝える時に、いくら口で表現しても分からない。同じ砂糖の甘さでも白砂糖の甘さと黒砂糖の甘さは違うし、果物でもイチゴの甘さと柿の甘さは違います。この甘さを本当に知るには自分が味わってみる以外には分かりようがないのであります。これは剣道の場合にも言えることで、いくら口をすっぱくして教えようとしても真意は伝わりません。自分の努力で体得して、初めて自分のものにすることができるのである。

それでは、「二王の機」とは、一体どう解釈すれば良いであろうか？

白隠禅師は、いつも座下の雲衲を叱責しては「居眠り坐禅をするくらいなら、ねじり鉢巻でバクチでも打っている方がまだ。」と言ったということである。また、白隠禅師は「勇猛の衆生のためには成仏一念にあり。懈怠の衆生のためには涅槃三祇に亘る。」と言っている。「涅槃三祇に亘る」とは、悟るためには無限の時間が必要だ

ということで、禅の修行も捨て身の勇猛心がなければ成就しない
 ということを示されている。正三和尚も、「良い気持ちで、居眠り
 半分で坐禅するようなことでは、いつまでたっても六賊煩惱を断ち切
 ることはできない。」と言われる。

我が門の公案に「雲居強覚禅師 衆に示して云く、“たとえば獅子
 の如し。象を捉うるも其の力を全うし、兎を捉うるも亦其の力を全
 うす。”時に僧あり、問う、“未審し何の力をか全うす？”居云く、
 “不欺の力”というのがある。正三和尚のいう「二王の機」とは、
 一つには、この「不欺の力」である。「純一無雜」にして「必死三昧」
 の境涯からほとぼしり出るところのはたらきである。そして、二つに
 は、とことんまで「真実の自己」を追究し続けてゆく強い意志、すな
 わち大勇猛心である。これが、正三和尚の「二王の機」である。

今日の提唱は、これで終わります。

(平成19年10月19日、豊橋市金西寺における修禅会の提唱より)

著者プロフィール



丸川春潭 (本名 / 雄浄)

昭和15年生まれ。大阪大学理学部卒業。住友
 金属工業技監、日本鉄鋼協会理事を歴任。元
 大阪大学特任教授。現在、中国東北大学名誉
 教授。工学博士。昭和34年、人間禅立田英山
 老師に入門。現在、人間禅総裁・師家。庵号
 / 葆光庵。



延時真覚 (本名 / 道春)

昭和16年、鹿児島県生まれ。昭和40年、熊本
 大学理学部卒業。平成14年、ウエルファイド
 (株)退社。剣道教士七段。昭和52年、人間禅
 松崎廓山老師に入門。現在、人間禅師家。庵号
 / 芳雲庵。